

板倉聖宣伝 = 仮説実験授業成立史 - 3 - —— スターリン体制下の科学的認識論と弁証法的唯物論 ——

小野 健 司

The Biography of Kiyonobu Itakura = The History of the establishment of
“Hypothesis-Experiment Class” -3-
—— Scientific Epistemology and Dialectical Materialism under Stalin's Regime ——

Kenji ONO

ABSTRACT

This paper attempts to clarify the history of the establishment of the “Hypothesis-Experiment Class” (“Kasetsu-Jikken-Jugyo” in Japanese) while tracing the life of Kiyonobu Itakura (focusing on the history of politics and science under Stalin's regime).

In this paper, particular attention was paid to the following point.

- ・ What role dialectical materialism played as a standard of scientific truth under Stalin's regime.

KEYWORDS : Kiyonobu Itakura, Hypothesis-Experiment Class, dialectical materialism, Nikolai Vavilov, Trofim Lysenko, Josef Stalin

●政治の変動に翻弄される学生運動

こうして見とおしを誤ってしまった「全学連」(国際派)による学生運動は、急激に停滞していきました。そうしたなか、コミンフォルムによってその方針を批判されていた日本共産党は、1951年2月に、一転してコミンフォルムからの批判を受け入れることを表明しました。そのうえで、これまでの「平和革命」という目標から、「武装革命」へとその方針を180度転回させたのでした。

この日本共産党の方針転換は、学生運動に対しても大きな影響を与えました。これまでの「国際派」(=反主流派)指導部を取って代わって、日本共産党の「主流派」を支持する学生たちが、主導権を握るようになったのです。そして3月には、「全学連」では、委員長をはじめとして、執行部が不信任案を出され、辞任に追いやられるという事態が起きました。

これによって学生運動の方針や戦術が、これまでとは異なった、より過激なものに変化しました。このことについて板倉は、次のように回想しています。

私は主流派の人々の学生運動の指導方針を見おどろきました。そこには理論も情勢分析も見通しもなんにもないのです。国際派の人々は演説するとき、きまったように国際情勢と国内情勢の分析からはじめました。そしてそこにはかなり明確な見通しが提出されていました。しかし、主流派の人々の演説はまったく感情的・主観的なものにしかすぎないように思われました。主流派の人々は主導権をにぎってからしばらくするとしばしばストライキを提案しましたが、それはストライキをする必要があるというだけで、ストライキの実現までの具体的な見通しはまったく立てられていないのが常でした。そこで当然のこととしてストライキ提案はまったくの不発におわりました⁽¹⁾。

こうしたなか、「新制」東大の学生運動のリーダーたちは、すっかり自信を失ってしまっていました。彼らは、自分の頭で考え行動することをやめて、〈ソ連

や中国の共産党指導者たちの考え方をひたすら学ぶ」ということだけに、その力を注ぐようになってしまっていた、ということです。そうした状況を目の当たりにした人物は、次のように回想しています。

1951年に私は、新制東大（駒場の教養学部）の国際派細胞の指導に当たった時、哲学も語学も数学も経済学も勉学を一切放棄してひたすらスターリンや毛沢東だけを指針に仰ぐ駒場寮の活動的な寮生に直面して驚きました。ボルシェビキ型学生運動の自滅への道でした。こうして当時「大衆団体」内の「党員」は、全力を党＝国際派決定の実現に邁進しますから、どの団体の行動も一致調整されるし、画一的になります⁽²⁾。

そうしたなか、「国際派」の学生たちにとって、さらに大きな衝撃を与えられるできごとが起きました。コミンフォルムが、一転して、日本共産党（主流派）を支持する声明を発表したのです。それは、日本共産党の方針転換から半年ほどたった、1951年8月のことでした。これによって「国際派」の学生たちは、大混乱に陥ってしまいました。

これまで「国際派」の学生運動は、コミンフォルムの方針を絶対的な指標にしておこなわれていました。こうした運動方針を継続して、コミンフォルムの決定に従うのであれば、これまでの日本共産党（主流派）に対する批判的な立場から一転して、支持する立場に立たなければならなくなったからです。

しかし、このような方針の転回は、それほど簡単ではありませんでした。それは、〈これまでの自分たちの運動方針が間違っていた〉ということを即、認めることにつながるからです。そこで、〈これまでの運動方針に誤りはない〉と判断して、日本共産党への批判の立場をとりつづけることも可能でした。しかし、それでは、〈これまで彼らにとって絶対的な基準であったコミンフォルムの判断が誤っている〉ということの意味することになってしまいます。このように彼らは、どちらの立場を選ぶにしても、これまでの自分たちの運動に対する根本的な反省を迫られた、というわけです。

●権威主義に対する警戒感

結局、「全学連」のリーダーのほとんどは、〈コミンフォルムの方針に従って日本共産党を支持する立場にたつ〉ことを選びました。そこで、以前に日本共産党から除名処分を受けた学生たちは、これまでの自分たちの運動方針の誤りを認めた「自己批判書」とともに、日本共産党への「復党願」を提出することになったようです。

そうしたなかで、大学3年生となっていた板倉は、〈学生運動からはいっさい手をひく〉という選択をしました。このことについて板倉は、自伝のなかなどでは、これまで特に付けにすることはしませんでした。しかし、非公式に発したとされる言葉なら、以下のように残されています。

〔全学連の国際派は〕〈アメリカ占領軍は解放軍である〉と規定していた日本共産党とケンカしてた。それが、ソ連共産党が今度は日本共産党支持になってしまった。すると、〈モスクワが正しい〉という原理に立つと、〈国際派全学連が間違っていた〉ことになるんです。「いままでそう言っていたんだから、そう言ってやめちまえ」と僕は、学生運動をやめようと言ったんです。「みんなインチキだ」とは言えないから「筋を通せ」と言って運動から手を引いたわけ。牧（衷）君はそのとき「板倉は教条主義だ」と言っていた⁽³⁾。

それでは、ほとんどの「学生運動のリーダー」が、コミンフォルムの決定に従って日本共産党の支持に転じるなか、板倉が、「いっさい学生運動から手を引く」ということを選んだのは、どのような理由によるものだったのでしょうか。それは、コミンフォルムの方針に対して盲目的に従う権威主義に対する警戒感が、板倉に芽生えていたからと言っていいでしょう。その警戒感の基礎にあったのは、これまでの「主体的唯物論」をはじめとする科学論や科学史の勉強によって培われた実験的な認識論だったと言っていいでしょう。じつをいうと、板倉が、実験的な認識論を確立していく過程は、〈当時の世界中のマルクス主義者たちが絶対的な権威とみなしていたスターリン〉に対する批判意識の確立の過程でもあったのです。

●スターリンによる農業の集団化政策

1924年1月に、ソ連の最高指導者だったレーニン（1870～1924）が死亡しました。その後、共産党内での権力闘争に勝利したのは、共産党書記長のスターリン（1878～1953）でした。その勝利宣言ともいえる「国民経済発展5ヵ年計画」は、1929年4月に決定しました。そこでは、ソ連の経済発展のために、工業面では重工業化を、農業面では農業の集団化を推進していくことが示されました。

特にスターリンは、農業の集団化政策によって、〈ソ連の農業生産量が飛躍的に高まるだろう〉と予想しました。農業の集団化とは、これまで各農民のあいだで私有されていた小規模な農地を共有化して、「集団農場（コルホーズ）」と「国営農場（ソフホーズ）」を設立し、大規模な集団農業を営む、というものでした。これにともなう、トラクタやコンバインなど近代的な農業機器を導入し、それらも共有するというのです。こうした農業の集団化によって、生産効率も高まるとともに、一部の農民に富が集中することなく、農民全体が豊かになるだろう、と考えたのでした。スターリンは、その年の11月に「偉大な転換の年」という論文を発表しました。そのなかでスターリンは、農業の集団化は、半年ほどのあいだに、「あらしのような発展テンポ」をとげつつあり、「空前の成功」を収めていると非常に高く評価しました。そのうえでスターリンは、〈科学が実践から学ぶことの必要性〉について、次のように書きました。

5万ないし10万ヘクタールを擁する大規模の穀物農業工場を組織することの可能なことと、時宜に適したものであることとに反対した「科学」の反対論は、こなごなに崩壊し、粉碎されてしまった。実践が、「科学」に学ばなければならぬばかりでなく、「科学」が実践から学んだところで、ちっともさしつかえのないことを、いま一度示して、実践は「科学」の反対論を論破した⁽⁴⁾。

さらにスターリンは、次のように、農業の集団化政策による農業の大幅な飛躍を次のように高らかに宣言しました。

コルホーズ化とソフホーズ化の運動が成長し

たことによって、われわれは穀物危機から完全に脱出しつつあるか、でなければすでに脱出したということを、確信をもっていうことができるのである。そして、コルホーズとソフホーズとの発展が急速なテンポで進んでゆくとすれば、ざっと3年後には、わが国は世界最大の穀物産出国とまではならないまでも、最大の穀物産出国のうちの一つになるということを、うたがう理由は少しもないのである⁽⁵⁾。

スターリンによると、そうした予想には確かな根拠がありました。スターリンは、この根拠について、次のように述べています。

この成功は、なによりもまず、党が、協同組合運動を普及させることによって、農民大衆をコルホーズに徹底的に引き入れつつ、大衆教育のためのレーニン主義的政策を実行してきたことによって、説明されるのである⁽⁶⁾。

つまりスターリンは、こうした共産党による農民に対する「教育」をおしつけることなくおこなうことによって、はじめて「コルホーズ化運動を、農民自身の真に大衆的な運動に変え」ることが可能となった、というのです⁽⁷⁾。

その結果、スターリンの報告によると、1932年末までに、「党は、コルホーズをして現在、農民の手にある全耕地の7割以上を占めさせ」ることに成功した、といいます⁽⁸⁾。

●農業の集団化政策の実践とその結果

それでは、農業の集団化政策は、スターリンの宣言どおり、実際にうまく成功を取めたのでしょうか⁽⁹⁾。じつをいうと、農民たちの自発性に基づいておこなわれるはずの農業の集団化は、実際は、強制的に進められていました。もちろん、これに対して農民たちは、様ざまな抵抗を示しました。たとえば、自分が飼っている家畜を殺してしまう農民が現われました。家畜がコルホーズのものになってしまうくらいなら、そうした方がまだましだと考えたからです。また、コルホーズの施設や農機具を破壊しようとする者や、仕事を意識的にさぼろうとする者、農村を離れて工場で働くとする者など、さま

ざまな抵抗がみられました⁽¹⁰⁾。

しかし、スターリンをはじめとする共産党指導者は、〈そうした事件が農民による集団化政策に対する抵抗によるものである〉とはとらえませんでした。スターリンは、「5ヵ年計画」の決定から1年後の1930年3月に、その時点での「コルホーズ運動の諸問題」について声明を発表しました⁽¹¹⁾。

まずスターリンは、「社会主義の方への農村の根本的な転換は、すでに保障されたものと見なしてもよい」⁽¹²⁾として、農業の集団化政策の成功を確認しました。その一方で、スターリンは、次のように、その成功に酔いしれて政策の運用を誤ってしまうことに対して、次のように強く戒めました。

わがコルホーズ化政策の諸成功は、その中でも、それが、すなわちこの政策が、コルホーズ化運動の自由意志ということに立脚し、ソ同盟のそれぞれ異なる地方における条件の相違を十分考慮しているということによって説明される。コルホーズを力づくでつくりあげることはできない。そんなことは馬鹿げたことであり、また反動的なことであろう。コルホーズ化運動は農民大衆の側からの、積極的な支持に立脚しなければならない。発展した諸地方における基本的コルホーズ建設のやり方そのままを、まだ発展しておらぬ地方へ、機械的に移植してはならない。そんなことは馬鹿げたことであり、また反動的なことであろう。このような「政策」は、集団化の理念の威信を、ただの一撃で失墜せしめてしまったであろう⁽¹³⁾。

さらにスターリンは、このような党中央の政策を「曲解した政策」が、実際に行なわれているとして、次のように強く批判しました。

これらの曲解、コルホーズ化運動におけるこのお役人的な法令による命令主義、農民にたいするこれらのくだらない脅迫は、いったいだれに必要なのであろうか？ われわれの敵以外には、だれにも必要ではないのだ！／これらの曲解は、どんな結果にみちびきうるであろうか？ われわれの敵の強化とコルホーズ化運動の理念の威信の失墜にみちびく⁽¹⁴⁾。

結局、コルホーズ運動をめぐる様ざまな事件が、「集団化政策」そのものに対する農民らの反対によるものなのか、それとも、その政策の運用の仕方によるものなのか、以上のことだけでは判断はできません。しかし、少なくとも、農民たちのなかには、コルホーズ運動を必ずしも良いとは思っていない者が少なからずいたことはたしかです。じつは、スターリンによる「政策の曲解」による農民への政策の押しつけに対する批判声明が発表された後、強制力は弱まりました。そして、その半年後には、「全国の農業集団化率は、58%から21%にまで低下した」というのです⁽¹⁵⁾。

●大飢饉の発生とその原因

しかし、その後も「コルホーズ」運動は、強くおし進められました。そして、1932年の夏までには、農業集団化率は60%を超えるまでに回復しました⁽¹⁶⁾。それなら、集団農場化政策は、はたして当初の意図どおりの成果をもたらしたのかということ、けっしてそうではありませんでした。ソ連は、「3年後に世界最大の穀物産出国のうちの一つになる」どころか、穀物の生産量は停滞し、飼料不足による大量の家畜が死亡した、というのです⁽¹⁷⁾。

こうしたなかで、国家による農産物の調達とは、今まで以上に強められていきました。「5ヵ年計画」の重要な柱のひとつだった「重工業化」を進めるためには、機械の購入資金として外貨の獲得が必須でした。当時のソ連の重要な輸出品といえば、穀物でしたから、その調達量を上げることによって、「計画」をさらに進展させようとしたのです。そうした農業生産力の停滞と無理な穀物調達がその原因となり、1932～4年には、「ソ連全体としておそらく確実に400万人をこえる人命」が失われる大規模な飢饉が起りました⁽¹⁸⁾。こうした未曾有の危機のさなかの1933年1月のことです。スターリンは、共産党の総会で、〈農業の集団化政策がきわめて大きな成果を収めた〉として、次のように総括しました。

ほとんど全部の貧農が、コルホーズ建設に加入するにいたったこと、この基礎のうえに、農民がクラーク〔富農〕と貧農とに、階級分化す

ることを内部から掘り崩したこと、これらと関連して農村における窮乏と貧困とを根絶した⁽¹⁹⁾。もちろんスターリンは、この大飢饉の状況を把握していました。しかし、スターリンは、飢饉が起った原因を、すべて、反革命的な「資本主義的諸要素」⁽²⁰⁾の「妨害工作」によるものとみなしたのです。このことについて、スターリンは、次のように述べました。

ソヴェート権力にたいし真向から攻撃をおこなうほどには、もはやこれらの連中は力をもっていない。彼らと彼らの階級は、かかる攻撃をすでに数回にわたって実行したのであったが、撃破され、蹴散らされたのであった。それゆえ、彼らにのこされているところの唯一のないうること、それは、労働者、コルホーズ員、ソヴェート権力、党に卑劣な害を加え、かつ妨害工作をなすことである。しかして、彼らは、秘密破壊工作をやって、できるかぎりの卑劣な害を加えているのである。倉庫に火を放ち、また機械を破壊している。サボタージュを組織している。コルホーズで、ソフホーズで、妨害工作を組織し、しかして彼らのうちのある者ども、そのうちには、ちょっとした大学教授もいるが、彼らの妨害工作における発作はコルホーズとソフホーズとの家畜のあいだにペスト、炭疽熱病を流行させ、馬に脳膜炎の黴菌が伝播するように助成する、等々というところまでにいたっているのである⁽²¹⁾。

●理論とテーゼに基づいた政策の実践

その後、大量のコルホーズ幹部が、その「妨害工作」を扇動した罪で逮捕されました。このような事態を前にして、スターリンを筆頭に共産党指導者たちには、〈農業の集団化政策自体が誤っているのではないか〉という疑念は、まったくと言っていいほどありませんでした。それは、農業の集団化政策をはじめとするすべての政策において、革命の無謬性とでもいべき認識が、その基礎にあったことによるものです。

そもそも農業の集団化政策の目的は、〈抑圧され

ている農民の解放と農業生産性の向上〉という点にありました。農業の集団化政策は、こうした誰もが正しいと認めざるをえないような正義がもとになってはじまったものといってよいでしょう。それに加えて、当時のソ連共産党には、〈自分たちの実践を阻もうとする敵〉が実際に存在しました。これまで〈農民の抑圧と富の占有〉を果たしてきた旧体制の支持者などです。ソ連の共産党指導者たちにとって、〈革命によるすべての社会・政治的な行動は、そうした悪意をもった敵たちとの闘争である〉ととらえることが容易にできる条件がととのっていたのです。

だからといって、スターリンをはじめとする指導者たちが、〈正義に基づいて立てた政策は、すべていい結果をもたらす〉という単純な思考に陥ってしまっていた、というわけではありませんでした。なにより、ソ連共産党は、〈理論やテーゼに基づいて政策を立て、実践することを重視する〉という姿勢を、当時の世界のどの政府や政党よりも、鮮明に示していたからです。

たとえばスターリンが、1929年12月末におこなった「ソ同盟における農業政策の問題について」という演説には、そうした姿勢を明確に見てとることができます。スターリンは、集団農場化の進展に端的に示される「社会主義建設の実践活動上における成功」を称賛する一方で、社会主義建設の「理論上における活動」の立ち遅れも同時に指摘しました。この立ち遅れによって、「わが実践活動家たちの頭脳は、ブルジョア的理論によって濁されてしまっている」というのです。スターリンは、それを解決するために、「理論上の階級闘争」が必要不可欠だとし、次のように述べました。

マルクス主義的・レーニン主義的理論を基礎として、ブルジョア的理論と徹底的に闘争をおこなうことなしには、階級敵にたいして、完全な勝利を獲得することの不可能であることを、理解するのは困難なことであろうか？⁽²²⁾

つまり、政策の理論やテーゼを導きだす際の思想上の原理として、マルクス・レーニン主義に基づいた「正統的な理論」を新しく規定する必要がある、

というわけです。その結果、正統化されたのが、「弁証法的唯物論」でした⁽²³⁾。この企ては、1938年に公けにされた、スターリンの「弁証法的唯物論と史的唯物論」という論文によって完成された、と考えてよいでしょう。その冒頭には、次のように書かれています。

弁証法的唯物論は、マルクス主義的・レーニン主義的党の世界観である⁽²⁴⁾。

この論文のなかでスターリンは、本来、自然科学の認識に関する理論である「弁証法的唯物論」を、社会や歴史の研究のために適用する意義について唱えました。スターリンは、それによってはじめて社会や歴史を科学的に認識することができるようになる、として次のように書いています。

もし自然の諸現象間の関連と、それらの相互制約とが自然発展の合法性であるならば、このことから社会生活の諸現象の関連と相互制約もまた、偶発的なものではなく社会発展の合法性である、ということになるのである。／つまり、社会生活・社会史は、「偶発事」の集積ではなくなる。なぜならば、社会は法則にしたがう社会の発展となり、社会史の研究は科学となるからである⁽²⁵⁾。

もちろんスターリンの目的は、社会や歴史に対する科学的な認識にもとづいたうえでソ連共産党の実践活動を科学的におこなうことにありました。このことについてスターリンは、次のように書いています。

プロレタリアート党の実践活動は、「傑出した個人」の善意の願望、「理性」、「一般的道徳」などの要求にもとづくのではなく、社会発展の諸法則とこれらの法則の研究とに立脚すべきである⁽²⁶⁾。

プロレタリアート党は、その実践活動をゆきあたりばったりにはなく、社会発展の諸法則にしたがって、これらの法則からの実践的演習〔結論〕にしたがっておこなうべきである⁽²⁷⁾。スターリンによると、そうすることによって、社会主義は人類のためのよりよき未来についての夢想から、一個の科学に転化するのである⁽²⁸⁾。

というのです。

このようにして、社会主義革命の必然性を「科学」的に明らかにすることができたら、当然、次の段階は、党の政策を弁証法的唯物論に基づいて「科学」的なものとするのが求められます。そうして立てられた政策は、科学に基づくものであるわけですから、本来それには、誤りがないと認識されてしまったのです。そこで、もしも政策を運用してゆくなかで、何か誤りが起った場合、それは、けっして政策に誤りがあったことが原因なのではなく、「資本主義的諸要素」による妨害工作か、あるいは理論や政策に対する誤った理解や運用が起きたため、と解釈されるというわけです。このようにして、革命・政策の無謬性は、成り立っていたのです。

●政治の大きな渦に巻き込まれた科学者

1935～7年のソ連の穀物生産量は、干ばつなどが原因で、さらに極端に減ることとなりました。それにも関わらず、農業の集団化政策は、引き続き強く推し進められました。そして、1937年には、9割を超える農家がコルホーズに加入するまでになりました。こうして、すべての農業関係者にとって、コルホーズの生産性を高めることは、もはや至上命令となったのです。

そうしたなか、スターリンは、1939年3月に開催されたソ連共産党大会での報告演説のなかで、マルクス主義の科学者である以上身につけておかねばならないとした「マルクス主義・レーニン主義の科学」について、次のように述べました。

科学の全部門にはたらくボルシエヴィキ〔ソ連共産党員〕が、義務としてその知識をもっていなければならないところの科学の一部門がある。それは社会・社会の発展法則・プロレタリア革命の発展法則・社会主義建設の発展法則・共産主義の勝利に関するマルクス主義・レーニン主義の科学である⁽²⁹⁾。

このようにして、科学者たちは、「マルクス・レーニン主義の科学」との結びつきをますます強く求められるようになっていきました。こうした状況のもと、ソ連の科学者たちは、望むと望まざるとに

かわらず、政治の渦に巻き込まれていくようになったのです。遺伝学者ニコライ・ヴァヴィロフ(1887~1943)は、その渦に深く巻き込まれてしまった一人でした。ヴァヴィロフは、「栽培植物の発祥起源」の研究や、作物の品種改良で大きな成果を残し、ソ連国内だけでなく、世界の農業振興に多大な貢献を果たした人物でした。

1940年7月のことです。日本の総合雑誌『中央公論』誌上に、「ソ連の自然科学界展望」という論文が掲載されました。その著者である生物学者の八杉龍一は、〈ヴァヴィロフが、ソ連の農業植物者の双壁のひとりである〉として、次のように書いています。

最近に於いて進化学説及び遺伝学説を中心とする問題が、ルイセンコ及びエヌ・イー・ヴァヴィロフの見解の相違の中に鋭く現れた。前者は小麦の春蒔化(これは1年の収穫を2回にする)の研究に於いて圧倒的な成功を収め、現在農業科学アカデミヤの指導者であり、後者は世界に於いて唯一の種子蒐集を行って貴重なる成果を得た人で、農業科学アカデミヤの前所長である。両者はソ連に於ける農業植物者の双壁である⁽³⁰⁾

じつをいうと、ヴァヴィロフは、この論文が発表された1940年に逮捕され、翌年には死刑判決を受けました。それは、「祖国への反逆・経済活動の加害行為・反ソ国際ブルジョアジーへの援助・反革命的行為の予備」など、革命に対する「妨害活動」に加わったことによるものでした。じつをいうと、このヴァヴィロフ逮捕の原因は、八杉によって「ソ連に於ける農業植物者の双壁」と称えられたもうひとりのルイセンコ(1898~1976)という科学者が大きく関係していました。

●ジャガイモの品種改良の研究

ヴァヴィロフはもともと、植物の病気について研究をしていました。視野がとても広がったヴァヴィロフは、顕微鏡をのぞいてばかりいることに満足できるような研究者ではありませんでした。なによりも彼は、ソ連、いや世界の人びとに役立つような研究がしたかったのです⁽³¹⁾。

ヴァヴィロフは、大学教授を辞めて植物栽培の研究所長となると、さっそくソ連国内だけでなく、世界の国ぐにに探検隊を派遣したり、自ら探検に出かけたりしました。世界各地で栽培されている植物のさまざまな品種や、その野生の品種をできるだけたくさん収集するためでした。そうして集めたたくさんの品種をもとに、新しい品種の作物を作ろうとしたのです。

ヴァヴィロフが関わった新しい作物のひとつに、ジャガイモがあります。当時、ソ連をはじめとするヨーロッパ各国で栽培されていたジャガイモは、伝染病に弱い品種ばかりしかありませんでした。そのため、いったん病気にかかると、ジャガイモの収穫量が極端に減ってしまい、どの国でもとても困っていました。そこでヴァヴィロフは、まず、「特に伝染病に強いジャガイモの品種を探す」ことを考えました。

それでは、そうしたジャガイモは、いったいどのようにすれば探し出すことができるのでしょうか。この広い世界から、何の手がかりもなく探すことなど、とうていできることはありません。しかし、ヴァヴィロフには、〈伝染病に強い品種を見つけるためには、どの地域を探せばよいか〉強い確信がありました。

ヴァヴィロフの研究テーマは、「作物の進化や伝播の過程を明らかにする」というものでした。それぞれの作物の祖先がどこで発祥し、そして、どのようにして広がっていったのか、ということについて明らかにしようというのです。こうしてヴァヴィロフは、個々の作物の品種ごとに、その発祥地を探っていくと、ある法則性を発見しました。たとえばジャガイモの発祥地は、世界の各地に点在しているのではなく、最終的にひとつの地域にたどり着く、ということがわかったのです。ヴァヴィロフは、その地域を「発祥中心地」と名づけました。さらに、「発祥中心地には、多様な形質の品種が集まっている」ということも明らかにしました。

ジャガイモの「発祥中心地」は、南米のペルーやボリビアといった国ぐにの高山地帯(アンデス山脈)でした。ヴァヴィロフは、1927年から33年のあいだ

に、その「発祥中心地」に探検隊を派遣したり、自ら出かけたりしたりしました。調査の結果、たしかにそこには、様々な性質や形のジャガイモの品種が見つかりました。ヴァヴィロフの予想どおり、それらのなかから、病気に強い性質を持った品種のジャガイモを発見することができたのです。

しかし、発見された病気に強いジャガイモは、そのままソ連で栽培するには、全く適していませんでした。このジャガイモを採集したペルーやボリビアは、赤道に近い（日照時間が短い地域）でした。そこでこのジャガイモは、〈日照時間の長いヨーロッパ北部〉では、うまく育たない性質をもっていたからです。

●ジャガイモの花と実（たね）

それなら、〈病気に強くて、しかもソ連の日照条件に合うジャガイモ〉は、どうしたら探すことができるのでしょうか。そうした品種のジャガイモを発見できれば、いちばんよいのですが、そうしたものは見つかりませんでした。そこでヴァヴィロフは、次のように考えました。

病気に強い性質を持ったジャガイモと、いまソ連で育てているジャガイモとをかけあわせて、新しい品種のジャガイモを作り出すとうまくいくのではないかと。

当時、ソ連で広く普及していたジャガイモの品種は、〈日照時間の長い南米のチリ〉が原産地でした。このジャガイモにかけ合わせようというのです。通常、植物の新しい品種を創り出すためには、二つの品種の一方から採った花粉を、もう一方のめしべにつけて受粉させて、できた種を播くようにします。実際に目にしたことがある人は少ないでしょうが、特に野生のジャガイモは、花を咲かせ実をつけるのが普通です。ところが私たちが口にしている栽培品種のジャガイモには、あまり実がならないので、あまり種も採れません。

どうして、そうってしまったかという、次のとおりです。人間が実際に口にしているのは、ジャガイモのイモの部分です。そこで、できるだけ大きなイモができる性質を持った品種の方が喜ばれます。そ

こで、本来なら花が咲いた後にできる種^{たね}を作るために使われるはずの栄養を、イモを成長させるために使うようにすれば、そのぶん大きなイモができます。そして、あまり実をつけないジャガイモ、つまり〈イモが大きい〉性質をもったジャガイモの株ばかりを選んで栽培しているうちに、〈あまり実が結ばず種^{たね}ができないジャガイモ〉のほうが、普通になった、というわけです。

さらに、栽培品種のジャガイモも、普通に花が咲くのですが、花粉の量は、野生のジャガイモと比べてとても少ないようです。そこでヴァヴィロフは、野生品種のジャガイモから花粉をとって、それを栽培品種のジャガイモのめしべにつけてやることを考えました。そして、そうしてできた実からとった種を畑に播いて、野生品種と栽培品種の両方の性質をもったジャガイモをつくりだそうとしたわけです。

●メンデルの法則と品種改良

ヴァヴィロフの指揮のもと、ソ連の探検隊は、7年間で合計150種類もの野生のジャガイモの品種を探し出すことに成功しました。それらの中から、特に〈病気に強い品種〉を選び出し、その花粉を採るところから実験は開始されました。それでは、そのようにしてできた種をまいて育てたジャガイモは、期待どおり〈病気に強くて、イモも大きい理想的なジャガイモ〉になったかという、そうではありませんでした。こうしてかけ合わせて作ったとしても、人間が望む性質や形ばかりがうまく伝えられるわけではないからです。そもそも、野生品種のほとんどは、イモの大きさや味が食用に適しません。そうした人間にとってマイナスとなる性質が伝わってしまうことも、ごく自然なことなのです。

しかし、そうやって作られたジャガイモのなかには、他のものよりは〈病気に強くてイモも大きい〉という性質のものもありました。そこで、ヴァヴィロフは、最初にとれたジャガイモのなかから、そうした形と性質をできるだけたくさん持ったジャガイモだけを新しく選んで、さらにかけあわせて育てることにしました。そしてさらに、三代目、四代目…と、同じように繰り返し、繰り返しおこなったので

す。それぞれの「親」の形質は、その「子」にでたらめに伝えられるわけではありません。それには、一定の法則性があることがわかっています。その遺伝の法則は、生物学者メンデル（1822～84）によって発見されたことから「メンデルの法則」と呼ばれています。ヴァヴィロフがジャガイモの実験をしていた当時は、既に「メンデルの遺伝の法則」が、遺伝学のなかでもっとも基礎的な法則として認められていたので、これにしたがって、計画的に効率よく品種改良がおこなえるようになっていました。

しかし、そうした研究は、ヴァヴィロフひとりの手ではできません。ソ連のジャガイモの品種改良は、ヴァヴィロフが関係して設立した400以上の研究機関や農場でおこなわれたのです。こうしてヴァヴィロフたちは、当時の最新の進化論や遺伝学の成果にもとづきながら、ようやく〈病気に強い性質をもった食用のジャガイモ〉を作ることになったのでした。

●ルイセンコの「大発見」

ヴァヴィロフが、栽培植物の発祥中心地と品種改良の研究によって、世界的に有名な遺伝学者として認められるようになったころのことです。ヴァヴィロフ（1887～1943）よりも10歳ほど若い農学者ルイセンコ（1898～1976）は、「秋播き小麦を春に播いて収穫する方法」について研究していました。秋播き小麦とは、〈秋に種まきをして、そのまま冬を越させて、春に収穫する小麦の品種〉をまとめてそう呼んだものです。ところが、冬の寒さがとても厳しいソ連では、秋播き小麦は、なかなか、うまく育てることができませんでした。そこで、ルイセンコは、冬を越さずになんとか〈春に種まきをして夏の終わりに収穫する〉ということができないか、と考えたのです。

そういうと、〈単に種を春に播けばよいだけのことではないか〉と考えたひともいることでしょう。しかし、秋播き小麦を春に播くと、うまく実がならないのです。ルイセンコは、〈秋播き小麦がうまく成長するための条件〉について考えてみました。そして、〈冬を越すこと自体がなにか必要な条件となっているのではないか〉と予想をたてました。そ

こで、今度は、次のような、人工的に冬を越すような条件のもとで種を育ててみる実験をしたのです。

〔秋播き小麦の〕種子を数日間納屋で水に漬け、一定の温度と湿度のもとで絶えずそれをかきまぜる方法をとる。そして水を吸って膨張した種子をそのまま畑に播く⁽³²⁾。

その結果、こんどは立派な実をつけた、ということです。このルイセンコの栽培方法は、「春化」(＝ヤロビザチャ、英語ではヴァーナリゼーション)と名づけられました。

ルイセンコは、この実践結果を、1929年に開催された遺伝学・育種学会で発表しました。この時の学会会長は、ヴァヴィロフがつとめていました。ルイセンコは、大きな自信をもって発表に臨みましたが、周りからの評価は、とても冷ややかなものでした。じつをいうと、この「春化」処理の方法は、すでに米国で発見されていたからです。さらに、ソ連国内でも、ヴァヴィロフの指導のもとに、同様の研究がすでに進められていました。

しかし、ヴァヴィロフ自身は、ルイセンコの着想を高く評価していました。そして、自分の研究仲間に、次のような内容の手紙を送りました。

ルイセンコによって行われてきた研究はとてつもなく興味をそそられるもので、極地試験場ではこうした研究で、さらに仕事をすすめることが必要です。

ルイセンコの研究は見事なものです。われわれに多くの新しい課題を提案しています。春化处理という手段で世界中の収集材料を見直すべきでしょう⁽³³⁾。

さっそくヴァヴィロフは、研究仲間に〈ルイセンコのもとを訪れて、その研究状況を詳しく調べてくよう〉指示しました。ところが、その報告は、次のように散々なものでした。

実験は取り散らかしているだけの非科学的なもので、理論も浅薄で国際的な知見にも欠けている⁽³⁴⁾。

●春化处理への大きな期待と失敗

それでは、ルイセンコの「大発見」は、その後、どうなったのでしょうか。じつをいうと、遺伝学界

以外の場合、とても大きな反響をひき起したのである。この「発見」は、農業の集団化政策が開始した時期とちょうどかさなっていました。そこで、「春化」処理は、「安価に、そして短期間で小麦の生産性を高められる農業技術」として、政府関係者のあいだで、とても大きな注目をあびたのでした。

その一方で、農業の生産性を飛躍的に向上させるという課題は、当然、ヴァヴィロフにも課せられました。ソ連政府は、1931年8月、ヴァヴィロフが所長をしていた植物栽培研究所と、おなじく総裁を務めていた農業科学アカデミーに対して、短期間で品種改良の成果をあげたり、作物をソ連全域で栽培可能にしたりするよう強く求めたのです⁽³⁵⁾。しかし、先にみたように、ジャガイモの品種改良をおこなうのには、多大な経費と時間が必要でした。そのため、リュセンコによる「春化」処理とは違って、ヴァヴィロフによる研究は、そうした政治的な立場に立った要求を満たすことはほとんどできませんでした。

1932年のことです。ソ連は、大規模な飢饉に見舞われました。この危機を脱出するためにも、即効性が期待できる「春化」処理は、ますます大きな期待をかけられることになりました。ところが、「春化」処理の実践は、明らかに失敗に終わりました。「春化」処理には、次のような重大な欠点があり、実用化までこぎつけることはできなかった、ということです。

数万トンの種子の春化处理は、わずらわしく、危険の多い仕事であり、特別な納屋と膨大な労力を必要とした。それと同時に、水に漬けた種子が、過度の発熱と発芽によってだめになる危険があり、事実それがしばしば起こった⁽³⁶⁾。

要するに、試験場など小規模な場所ではうまくいったとしても、大規模な農場でおこなおうとすると、途端に困難が生じてしまった、というわけです。その後も、リュセンコは、そうした「春化」処理の問題点を克服しようとしませんでした。その代り、なんと、その失敗の原因を他の要因に転嫁したのです。リュセンコは、スターリンをはじめとする、ソ連の全首脳が出席した、1935年の「第二回全ソ・コルホーズ突撃隊員大会」で、以下のような演説をおこないました。

同志諸君、春化处理の戦線に階級闘争はなかったであろうか。コルホーズには、〈種子を水に漬けるな、駄目になるぞ!〉と農民に〈ささやく〉富農とその扇動者がいた〈彼らのみでなく、すべての〈階級の敵〉がそうした〉。科学の分野においてだけでなく、そのほかの分野においても、コルホーズ農民を助けるかわりに、破壊活動を行なったのは、このような〈ささやき〉であり、富農や怠業者のペテンであった。階級の敵は、科学者であると否とにかかわらず、つねに階級の敵である⁽³⁷⁾

これは、スターリンが、農業の集団化の失敗の原因を「階級の敵」に転嫁した「論理」とおなじです。リュセンコは、それを科学の世界に適用したのです。このときのリュセンコの演説は、共産党機関紙『プラウダ』に掲載され、次のように大絶賛を浴びました。

〈春化处理、収穫量を増大させるすばらしい方法〉という見出しで大々的に掲載され、末尾に〈ブラボー、同志リュセンコ、ブラボー〉というスターリン賞賛の声まで添えられた⁽³⁸⁾。

●リュセンコの新しい実験

そうしたなか、リュセンコは、また新しい実験を開始しました。「春化」処理の場合は、秋播き小麦の種をいったん冬の低温条件におく必要がありましたが、今度は、そうした一連の過程を経ずに、種をそのまま春の気温の条件下で育てる、という実験をおこなったのです。リュセンコによると、

この実験の目的は、これらの秋播き性小麦に春化处理の段階を通過させず、しかもこうすることによってできるだけ長く出穂させないまま成熟させることであった⁽³⁹⁾。

ということでした。

通常、秋播き小麦は、春に播いてもうましくは育ちません。そこで、リュセンコが最初に温室で育てた小麦も、わずか数粒しか実をつけませんでした。次にリュセンコは、そうして得た数粒の種を、同じように「春」の条件のもとで育てました。そうした過程をなんとか繰り返したところ、秋播き小麦は、春

の条件のもとで播いても、通常どおりたぐさんの実をつけるようになった、というのです。

ルイセンコは、この実験をとおして、〈秋播き小麦が、通常とは異なる環境のなかで幾世代にもわたって育て続けられた結果、春播き小麦の性質を獲得するようになった〉と結論しました。しかも、このようにして秋播き小麦が獲得した性質は、遺伝性を持っているというのです。こうしてルイセンコは、〈後天的に獲得した形質が遺伝性をもつようになった〉という事実をもとにして、〈秋播き小麦をはじめとして、植物の形質は、不変の遺伝子ではなく、それらは環境によって決定される〉として、遺伝学のもっとも基礎的な概念である遺伝子の存在を否定する仮説を提唱したのです。

もしも、この仮説が真理であるとしたら、これまでに品種改良のためにかかっていた多額の費用と時間を大幅に削減することができるようになります。このように、ルイセンコによる新しい「発見」には、この時期のソ連の農学者や遺伝学者全員にとって至上命令となっていた農業生産性の飛躍的な向上、という政治的な課題を容易に解決する可能性があったのです。

●科学研究における実験の意義

じつをいうと、このルイセンコの考え方は、「獲得形質の遺伝」説と言われていて、以前から提唱されていた仮説でした。しかも、この仮説は、これまで追試実験によってことごとく否定され続けてきました。しかし、そうだからといって、ルイセンコのように、〈獲得形質の遺伝〉説を新しく提唱してはならないかという、けっしてそうとは限りません。どんなことでも、その正しさを実験的に証明できれば、よいからです。

しかし、ルイセンコは、先ほどの実験結果以上のことを示すことはありませんでした⁽⁴⁰⁾。さらに、他の科学者による追試の結果も示されることはありませんでした。このように、ルイセンコによる学説は、科学の真理性にとって必要であるはずの再現性にまったく欠ける、という致命的な欠陥をもっていたのです⁽⁴¹⁾。

1936年12月、ルイセンコは、国内の農学、遺伝学

者を集めておこなわれた農業科学アカデミーの総会で、「秋播き小麦の獲得形質の遺伝」に関する研究成果を発表しました。その発表のなかで、ルイセンコは、〈科学研究における実験の意義〉について触れる、次のような発言をしました。

外的条件が、限らない植物の成長過程で重要な役割を演じていることは、だいたい誰の目にも明白である。しかし、あとの世代の植物の本性を所定の方向に変化させるために、どのような条件が、いつ、植物の発育のどの段階に必要であるか、ということを、実験によって示し、証明した人は、私の知るかぎりまだ一人もいない⁽⁴²⁾。

おそらくルイセンコは、〈その実験による証明を果たすのは自分だ〉ということが言いたかったのでしょう。しかし、ルイセンコの手によって、それに見合うような実験的証拠が示されることは、この学会でも、それ以降もありませんでした。

じつをいうと、ヴァヴィロフも、この学会に参加していました。彼は、「ソヴェトにおける育種の進路」という講演を行ないました。そのなかでヴァヴィロフは、「栽培植物の発祥中心地」の研究の独自性とその成果について詳しく述べたうえで、次のようにその成果を高く評価しました。

「栽培植物の発祥中心地」に関する考え方の確立は、今までの科学や育種が知らなかった膨大で新しい品種や種の素材を現実に入手することを可能にしたのです⁽⁴³⁾。

そして、さらにヴァヴィロフは、実験的な証拠を示すことを欠いたルイセンコの〈獲得形質の遺伝性〉の発表内容に対して、〈いまだ確かな成果としては認められない〉として次のように強く主張しました。

アカデミー会員ルイセンコもまた、遺伝子に変異しやすく、実験者が適切に採用する何らかの方法で変えられるだろうと、その新しい推論を提出しているが、そのことを明確に証明したデータは、まだ示されてはいない。将来ルイセンコは、そのような変異の作出が実験的に可能であることを、明らかにするだろう。そしてそれでこそ、われわれが積極的に到達しようとする

る段階を迎えたことになる。しかしいまでも、この段階に達していることを遺伝学者も確かめる状況にはなく、こうした実験上のデータが欠けていることが、すべてを難しくしているし論議を呼んでいるのだ⁽⁴⁴⁾。

●ヴァヴィロフの実験観

その後も、ルイセンコが、『獲得形質の遺伝』説の実験的証拠を示すことはありませんでした。その代わりに、ルイセンコは、1937年ころから、自身が編集していた雑誌『ヤロビザーツィヤ [ロシア語で「春化」を意味する]』誌上において、ヴァヴィロフをはじめ遺伝学者たちに対する激しい批判をその内容とする論文を繰り返し掲載しはじめたのです。それらの論文には、「反動的」「観念論的」「形而上学的」「ブルジョア的」などといった、本来、科学とは直接関係のない政治用語や、哲学的な概念が頻繁に使用されていました⁽⁴⁵⁾。

1937年になると、他の雑誌や新聞にも、ヴァヴィロフら遺伝学者に対して同様の批判的な記事や論文が発表されるようになりました⁽⁴⁶⁾。さらに、それと並行して、多くの遺伝学者が逮捕され、銃殺されたり、獄死したりする者まで現れました。もはやヴァヴィロフの逮捕も、時間の問題でした。

しかし、そうしたなかでもヴァヴィロフの科学者としての姿勢は、はっきりしていました。これまでと何ら変わることなく、ルイセンコによる「獲得形質の遺伝性」に対して、実験的証拠を明らかにすることを求めたのです。1937年11月、ヴァヴィロフは、ルイセンコを支持する論文を掲載した科学雑誌『プリローダ [ロシア語で「自然」を意味する]』の編集部に対して、以下のように、〈実験の再現性の意義を強く唱えつつ、それを欠くルイセンコによる研究を批判した内容の手紙〉を送りました。

要点を示すと、ルイセンコの実験には特有な前提条件があり、いまなお疑問視されているのが事実である。実験とはなんべん繰り返し行われても、同じ結果であることによってのみ、証明されたことになるのだ。ルイセンコと同調者が行ったとされる実験による推論の多くのもの

は、残念ながらこの条件を満たしていない。より正確な証拠が求められている⁽⁴⁷⁾。

しかし、ヴァヴィロフにとって厳しい状況はまったく変わることがありませんでした。そして、ついには、かつてヴァヴィロフがその地位に就いていた農業科学アカデミー総裁の地位にルイセンコが就いたのです。1938年2月のことでした。

●真理の基準としての弁証法的唯物論

その後も、ヴァヴィロフは、機会があれば、自分たちの研究成果を具体的に示しながら、ルイセンコに対する批判を続けました。1939年3月に、ヴァヴィロフが所長をつとめる植物栽培研究所内で研究会議が開催されました。その際、ヴァヴィロフは、これまでに研究所が、品種改良の面で多大な成果を上げたことを述べるとともに、ソ連の特に遺伝学が直面している「難問題」について、次のように主張しました。

現在、問題になっているのは、この〔農学の〕広大な分野全体ではなく、遺伝学である。しかしそれが当面の難問題となったのは、われわれの概念が非常に拡大したからである。もちろん、この問題は、科学の世界で常にみられるように、直接の実験、事実によって解決されるべきであるが、それには長期にわたる作業が必要である⁽⁴⁸⁾。

この発言のなかで、ヴァヴィロフが念頭に置いていたのは、ルイセンコにほかなりません。ヴァヴィロフは、これまでと同様、〈実験によってのみ、その根本的解決をはかることができる〉と主張したのです。しかし、それが実現する可能性は、もはやなかったと言っていいでしょう。次のスターリンの発言は、理想的な科学者像について述べたものですが、ヴァヴィロフは、その理想像からかなりかけ離れた存在だったからです。

レーニン主義者だと自称してはいるが、自己の専門にとじこもり、たとえば数学・植物学、あるいは化学にとじこもって、自己の専門以外のことは、なに一つみない人間を、しんのレーニン主義者のうちに数えることはできない。

レーニン主義者は、ただ彼がこのんで選んだ科学の部門の専門家としてのみ存在することはできない。すなわち彼は、それとともに、自国の運命に切実な興味をもち、社会の発展法則によく通曉し、これらの法則を用うことができ、国の政治的指導に、積極的に参加することを熱望している、政治家・社会活動家でなければならない。このことは、もちろんボルシェヴィキ専門家たちにとっては一つのつけくわえられた負担であろう。しかしこれは、その結果として、大きな利益に値するような負担であろう⁽⁴⁹⁾。

このスターリンの演説がおこなわれた党大会の前年には、「弁証法的唯物論と史的唯物論」が出版されました。このときには、〈レーニン主義者、政治家・社会活動家〉であることと、〈科学的真理を見出す科学者〉であることとは、弁証法的唯物論を媒介として、とても強く結びつくようになっていたのです。こうしてみると、ヴァヴィロフが求めていた〈実験による真否の決着〉という真理観が受け入れられる余地は、まったくと言っていいほどなかった、といってもいいでしょう。

ヴァヴィロフ自身、そのことをわかっていたのでしょう。おなじ1939年3月には、全く別の会議上で、ヴァヴィロフは、科学者としての信念を次のように露わにしました。

植物栽培研究所の立場は、現代の世界の科学の立場でもあり、ファシストではなく正常かつ進歩的な科学者によって発展させられたものにほかならない。そしてもしここに、実践面および理論面におけるすぐれた育種家がいるならば、彼らが「ルイセンコが所長をつとめていた」オデッサ研究所にではなく、みなさんの従順な下僕に投票することを私は確信する。これは複雑な問題であり、農業人民委員部の命令をもってしても解決されないだろう。たとえば火焙りの刑に処せられようと、自己の信念は変えないであろう⁽⁵⁰⁾。

この発言から2ヵ月後の1939年5月、ルイセンコが総裁をつとめる農業科学アカデミーの幹部会が開催されました。ヴァヴィロフが所長をつとめていた植物栽培研究所による研究報告書を討議するため

す。この会議のなかで、ヴァヴィロフたちの研究に対して以下のような意見が、次からつぎへと放たれました⁽⁵¹⁾。

- ・「ダーウィンの名をあげ、マルクスとエンゲルスから例をとらないのはなぜか」
- ・「誰もがジャガイモの原産地がアメリカだと言っているが、私は信じない。レーニンがなんといったかあなたは知っているか」
- ・「ソ連共産党（ボルシェビキ）史の第4章には、進化論は「複雑さの増大だ」と書かれてある」
- ・「あなたはマルクスから学ぶことができなかったのか」
- ・「マルクス主義は、唯一の科学であり、ダーウィン主義は、その一部にすぎない」
- ・「世界についての真の認識理論は、マルクス、エンゲルス、レーニンによってもたらされた」
- ・「マルクス主義を除外したダーウィン主義論争を聞く時、一面ではすべてが正しいが、しかし他の面では、それが毛色の違う馬であるかのように、私には見える」

このように、どの意見も、〈ヴァヴィロフたちの研究が、弁証法的唯物論に依拠していない〉という批判につきるものでした。

そしてついに、ルイセンコは、〈もはや、政治的に決着をつける以外に選択肢はない〉として、この討議を締めくくる宣言を次のようにくぐりました。

ニコライ・イワノヴィチ（ヴァヴィロフ）私はあなたと同意見だ。自分の仕事を遂行することは、あなたにとって多少困難だろう。われわれはそれについて何回も話し合った。私は心からあなたに同情する。しかしあなたは私に不服従であり、それは植物栽培研究所が私に不服従だということを意味する。／ある種の措置をとることが必要であることをここに断言する。われわれはこのまま進んでいくことはできない。これは公正でないとはっきりあなたは言っている。あなたはそう言うてはいるが、考えていることは別だ。…われわれはほかの人々に依存し、別の路線、すなわち、行政的に服従させる路線をとらねばならないだろう⁽⁵²⁾。

もちろん、ルイセンコのような批判が、いくら繰り返されたとしても、科学上の真理がひっくり返せるはずがありません。しかし、それは、科学上の真理の基準として、実験結果がなによりも優先される条件が守られている場合にかぎります。しかし、この当時のソ連は、そうではありませんでした。実験結果よりも、はるかに優先される基準があったのです。それが、「弁証法的唯物論」でした。先に見たように、「弁証法的唯物論」は、ソ連共産党の理論やテーゼの科学的な基準として正統化されたものでした。それと同時に、「弁証法的唯物論」は、科学の世界においても、「真理」の基準として機能する役割をはたすようになっていた、というわけです。

●異なるふたつの科学者像

そうしたなか、1939年6月には、遺伝学者のグループが、共産党の指導者に対して、ルイセンコ派と遺伝学者とのあいだでの公開討論の開催を陳情しました。ルイセンコらによる遺伝学批判が、はげしく政治闘争化してしまっているのです、論争への介入をソ連政府に求めたのでした⁽⁵³⁾。本来であれば、科学上の論争に対して、「政治」的な介入を求めることなどありえないことです。しかし、当時のソ連では、もはやそれが当然のことと考えられるようになってしまっていたのです。

この要請に対して、共産党は、党の理論誌『マルクス主義の旗の下に』編集局の主催で、討論会を開催することに決定しました。このとき、この論争に決着をつける判定者として任命されたのは、哲学者のミーチン（1901～1987）でした。この時、ミーチンは、『マルクス主義の旗の下に』編集長であったほか、共産党中央委員、マルクス・レーニン研究所長、ソ連科学アカデミー会員でもありました。

本来、自然科学上の論争の判定を哲学者が決定する、ということは近代科学では考えられないことです。しかし、この討論会の目的は、最初から自然科学の真理を認識することには置かれていませんでした。当日の参加者に送られた招待状には、次のような開催目的が記されていたというのです。

遺伝学および育種の分野におけるマルクス・

レーニン主義の路線を確定する⁽⁵⁴⁾。

こうして1939年10月に、1週間かけておこなわれた討論会において、ルイセンコは、〈科学が果たすべき第一の目的は、政治的課題の解決である〉として、次のようにのべました。

引き受けたり命じられた問題の実践的解決に役に立つ理論だけが、真の科学的労働に値する。[ヴァヴィロフたちがよって立つところの]メンデル主義やモーガン主義は役に立たないばかりか、しばしば妨害している⁽⁵⁵⁾。

つまり、ルイセンコは、自分たちこそが「真の科学的労働」を十分に果たしている、ということを示したのでした。

これに対してヴァヴィロフは、〈自分たちが、これまでいかに農業の生産性の向上に貢献して来たか〉ということをも、その具体的な研究成果をもって、以下のように示しました。

新しい有望な品種がソビエトの畑に姿を見せ、数千万ヘクタールの耕地をおおっています。そしてこうした品種は遺伝学の理論にしたがって育種されたものです。……ここにはなんの危惧もありません⁽⁵⁶⁾。

さらに、ヴァヴィロフは、聴衆からの野次によって、なんども話を中断されながらも、自分の科学的真理観と実験観について、以下のように説き続けた。

- ・雑種における形質の遺伝については、メンデルの法則に従うとするのが、われわれの立場である。[中略]四十年間にわたって確かめられてきたメンデル(訳注:法則)が、否定されるとはまったく奇妙なことで、とくに私にとってはそうである。私は遺伝学の歴史に十分注目してそれに従ってきたし、それが義務とすら思ってきた。
- ・われわれのあいだに横たわっている不一致な点について、発達した科学(似非科学に対立するもの——遺伝学)の名のもとに、基本となる実験に耐え、科学によって乗り越える観点に立ちもどって、すなわち19世紀初頭から半ばまでの観点に立ちもどって、事実を確かめ合うことが必要なのだ。

- ・私たち真実の価値を認め評価し、自ら科学に奉仕する科学者にとっては、われわれの観点を拒否することは難しいことを理解して欲しい。あなた方は、現状がたいそう困難な状態にあることも受け入れてほしい。われわれが擁護していることのすべては、数限りないしっかりとした仕事の成果であり、ソビエトにおいても諸外国においても、明確な実験の結果なのだ。
- ・数多い議論の要点を述べるならば、そのための結論は直接実験を繰り返されることによってのみ達成できる。そのことはあらゆる実験が十二分な水準で実施されることが求められている。たとえそれが相反する観点からのものであってもである。
- ・最後に私がもっとも感じていることは、ソビエトの科学者は、たんに立証済みで完全な結果を明らかにしているばかりでなく、科学の検証に十分耐えられるものとしている。そのことがじっさいの育種に、取り入れられている。そうしたことを農業生産の場に持ち込むためには、正しい方法で正確に試験されることが必要なのである⁽⁵⁷⁾。

ヴァヴィロフが、自分の真理観・実験観をとおして示したこうした科学者像は、ガリレオをはじめとする近代科学を築き上げてきた人びとの姿でもあります。しかし、その姿は、スターリンが理想とした〈レーニン主義者、政治家・社会活動家〉としての科学者像とはかけ離れたものでした。ヴァヴィロフが描く科学者像は「自己の専門以外のことは、なに一つみない人間」であり、「真のレーニン主義者」とは認めることのできない存在にほかならなかったのです。

●弁証法的唯物論による「真理」の判定

討論終了後、哲学者ミーチンは、第一に〈ルイセンコが、農業生産の面で実践的な大きな成果をあげた〉こと。そして次に、〈遺伝学に弁証法的唯物論を適用して大きな理論的業績をあげた〉ことを絶賛しました⁽⁵⁸⁾。

その一方でミーチンは、ヴァヴィロフに対して、まず〈欧米の資本主義国で発展した遺伝学に対して

批判的でない〉という点を批判しました。さらに、〈遺伝学の発展を弁証法的にとらえることができていない〉として、次のようにも批判しました。

遺伝学の発展において、本当に単一の純粋な路線が存在するのか？この科学においては矛盾も闘争も存在しないのか？⁽⁵⁹⁾

つまり、〈今日の遺伝学が、ダーウィンの進化論を出発点とする一本道を歩んで進歩をとげてきた〉と認識するのはまったくの誤りで、以下のように弁証法的にとらえなければならない、というのです。

階級社会、資本主義社会の科学の発展は矛盾に満ちて進行する。科学の内部では、進歩的な原理と反動的な原理との闘争が進行する。それゆえ、高度な〈世界的科学〉に向けて、弁別されたアプローチが必要なのである⁽⁶⁰⁾。

しかし、「弁証法的唯物論」に基づいて考えたからと言って、必ずしも科学的認識が成立するわけではありません。科学とは単なる思想でも、方法でもないからです。弁証法的に思考したかどうかにかかわらず、はたしてどのような概念や法則を発見することができたのか、ということの方が何よりも重要なことなのです。〈弁証法的に思考したかどうか〉という基準だけでもって、真理か否かを決めるのは、観念論にほかなりません。

それにもかかわらず、哲学者ミーチンは、この討論会の勝利者をルイセンコと判定しました。〈ルイセンコの方が、はるかに弁証法的唯物論に依拠している〉という判断によるものです。そもそも〈討論という観念の世界だけで科学上の真理を決めよう〉というのですから、ヴァヴィロフが主張した〈科学上の真理は実験によって決まる〉という真理観が認められる余地は、最初からなかった、と言ってもいいのです。ヴァヴィロフが、「階級の敵」として逮捕されるのは、もはや時間の問題でした。

1940年8月、ヴァヴィロフは、とうとう逮捕されてしまいました。翌41年には、非公開の法廷において、死刑判決が出されました。その判決文は、以下のとおりでした。

捜査したところによると、1925年以来ヴァヴィロフは基本的に反ソビエト組織「労働農民

党」の全般にわたっての指導者の一人であり、1930年以来、右翼ソビエト組織に積極的に参加して、ソビエト連邦農業人民委員会といくつもの研究所で活動した。…反ソビエト組織のために広範囲にわたるサボタージュを行い、農業集団農場システムの基礎を壊し、その消滅を目指し、さらにソビエト連邦における社会主義農業の解体と衰退を心掛けた。…反ソビエトを目標として、国外に脱出した白軍サークルと接触し続け、ソビエト連邦の国家秘密でもあるような情報を提供した。…ソビエト連邦最高軍事法廷はニコライ・イワノヴィチ・ヴァヴィロフは有罪であって、最高刑である銃殺刑とすると決定した。個人の財産は没収する。この判決が最終で、控訴はない⁽⁶¹⁾。

そして、ヴァヴィロフが犯した罪としてあげられたのは、以下のとおり、科学とはまったく無縁であるはずの58項目でした⁽⁶²⁾。

「右翼の陰謀への荷担」
「イギリスのスパイ」
「勤労農民党の指導者」
「農業におけるサボタージュ」
「白系亡命者たちとの関係」

その後、ヴァヴィロフは、1943年1月に獄中で死亡してしまいました。

注

- (1) 板倉聖宣『科学と方法』季節社、p.282
- (2) 田中智子「〈インタビュー〉第一高等学校・東京大学における戦後学生自治運動(1)——岡田裕之氏に聞く——」『東京大学史紀要』29号、2011年3月、p.91
- (3) 古田克己編『板倉論文を追って』仮説実験授業ガリ本図書館・つばさ書房(私家版)、1990年、p.32
- (4) スターリン「偉大な転換の年」『レーニン主義の諸問題』所収、真理社、1952年、p.340
- (5) スターリン、同上書、p.342
- (6) スターリン、同上書、p.338
- (7) スターリン、同上書、p.338
- (8) スターリン「第一次五ヵ年計画実現の総結果」、前掲書(4)所収、p.477
- (9) 農業集団化政策の実際とその結果については、塩川伸明「第5章 上からの革命」「第6章 盛期スターリン時代」、ともに『世界歴史大系(ロシア史3)』所収、山川出版社、1997年を典拠としました。
- (10) 塩川、前掲書(9)、p.171
- (11) スターリン「成功による眩惑」前掲書(4)所収、pp.375-381
- (12) スターリン、同上書、p.375
- (13) スターリン、同上書、p.377
- (14) スターリン、同上書、p.378
- (15) 塩川、前掲書(9)、p.189
- (16) 塩川、同上書、p.189
- (17) 塩川、同上書、pp.201-2
- (18) 塩川、同上書、p.202
- (19) スターリン「第一次五ヵ年計画の総結果」前掲書(4)所収 p.481
- (20) スターリンによると、「資本主義的諸要素」とは、「産業家とその下僕、商人とその手代、旧貴族と僧侶、クラーク[富農]とクラーク支持者、旧白軍将校と村の巡査、旧警官と憲兵、排外主義的意見をもつあらゆる種類のブルジョア・インテリとそのほかあらゆる反ソヴェート諸分子」ということです。スターリン「第一次五ヵ年計画実現の総結果」前掲書(4)所収、p.489
- (21) スターリン、同上書、pp.489-90
- (22) スターリン、「ソ同盟における農業政策の問題について」前掲書(4)所収、p.347
- (23) 佐々木力『マルクス主義科学論』(みすず書房、1997年)は、「弁証法的唯物論」が、ソ連共産党の理論やテーゼの基礎となる思想上の「科学」的な原則となった過程を明らかにしている。ここでは、特に p.277を典拠とした。
- (24) スターリン「弁証法的唯物論と史的唯物論について」前掲書(4)所収、p.653
- (25) スターリン、同上書、p.664
- (26) スターリン、同上書、pp.664-5
- (27) スターリン、同上書、p.665
- (28) スターリン、同上書、p.665
- (29) スターリン「ソ同盟共産党(ボルシェヴィキ)中央委員会の活動に関する第18回党大会における報告

- 演説」前掲書(4)所収, p.723
- (30) ハ杉龍一「ソ連の自然科学界展望」『中央公論』1940年7月号, p.119
- (31) ヴァヴィロフによるジャガイモの品種改良の研究については、次の3冊を典拠とした。
1. ヴァヴィロフ著・中村英司訳『栽培植物発祥地の研究』八坂書房, 1980年。
 2. ヴィヴィロフ著・菊池一徳訳『(ヴァヴィロフの)資源植物探索紀行』八坂書房, 1992年。
 3. 板倉聖宣『ジャガイモの花と実』福音館書店, 1968年
- (32) メドヴェージェフ著・金光不二夫訳『リセンコ学説の興亡』河出書房新社, 1971年, pp.24-5
- (33) イーゴリ・ロスクートフ著, 山田実 訳『食を満たせ——ヴァヴィロフとリセンコの遺伝学論争と植物遺伝資源——』未知谷, 2009年, p.17
- (34) 同上書, p.18
- (35) 藤岡毅『リセンコ主義はなぜ出現したか』学術出版会, 2010年, p.149
- (36) メドヴェージェフ, 前掲書(32)p.25
- (37) 同上書, pp.25-6
- (38) 藤岡, 前掲書(35), p.153
- (39) メドヴェージェフ, 前掲書(32), p.33
- (40) 同上書, pp.32-4
- (41) 同上書, p.34
- (42) 同上書, p.42
- (43) ヴァヴィロフ著・中村英司訳『植物栽培発祥地の研究』八坂書房, 1980年, pp.189
- (44) ロスクートフ, 前掲書(33), p.31
- (45) メドヴェージェフ, 前掲書(32), pp.50-5
- (46) 同上書, pp.55-6
- (47) ロスクートフ, 前掲書(33), p.17
- (48) メドヴェージェフ, 前掲書(32), p.64
- (49) スターリン, 「ソ同盟共産党(ボルシェヴィキ)中央委員会の活動に関する第18回党大会における報告演説」前掲書(4)所収, p.723
- (50) メドヴェージェフ, 前掲書(32), p.64
- (51) 同上書, pp.65-70
- (52) 同上書, pp.69-70
- (53) 藤岡, 前掲書(35), p.167
- (54) 同上書, p.168
- (55) 同上書, p.170
- (56) ロスクートフ, 前掲書(33), p.43
- (57) 以上の引用は, ロスクートフ, 前掲書(33), pp.46-8
- (58) 藤岡, 前掲書(35), p.171
- (59) 藤岡, 前掲書(35), pp.171-2
- (60) 藤岡, 前掲書(35), p.171
- (61) ロスクートフ, 前掲書(33), p.65
- (62) メドヴェージェフ, 前掲書(32), p.77

抄 録

この論文の目的は、板倉聖宣の生涯（今回は、スターリン体制下の政治と科学の歴史を対象としました）をたどりながら、仮説実験授業の成立史を明らかにすることです。

この論文では、以下の点について特に注目しました。

・弁証法的唯物論は、スターリン体制下において、科学的な真理の基準として、どのような役割を果たしたか

キーワード：板倉聖宣，仮説実験授業，弁証法的唯物論，ニコライ・ヴァヴィロフ，トロフィム・リセンコ，ヨシフ・スターリン